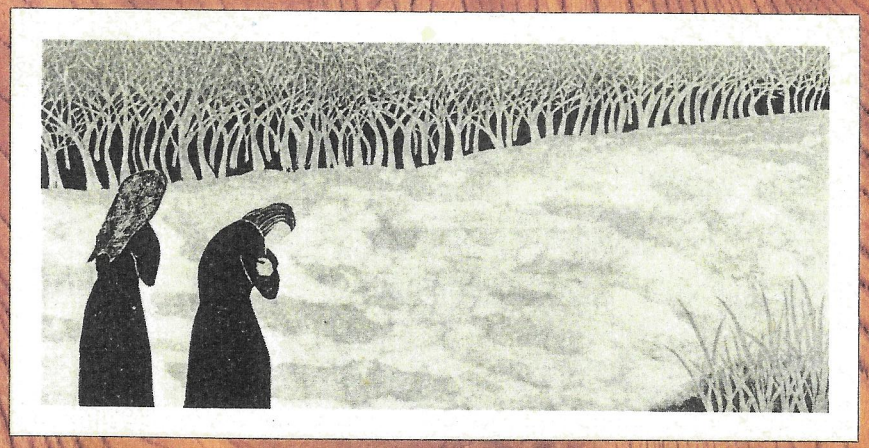
# MICHI, *A Journal for Cultural Exchange*

Vol. 1, No. 1, Spring 1978 Yamaguchi Shoten, Kyoto, Japan

MICHI, *A Journal for Cultural Exchange*



Vol. 1, No. 1, Spring 1978 Yamaguchi Shoten, Kyoto, Japan

## To the Reader: An Editorial

"Cultural Exchange" is a phrase used so often that it may sound trite. It still has validity, however, and will continue to be meaningful as long as human culture exists in different forms. As one culture comes into contact with another, it alternately rejects and assimilates the other, because certain aspects of a new experience are unfamiliar and alarming. This is why a foreign impact at once repels and attracts.

It is true that Japan has been influenced by many other countries which have been interested in her and studied her, and that Japan in turn has not spared efforts to get to know them. However, when one looks back on the thirty years since World War II, one does not feel that this has always been true. As the saying goes, one can swim from England to France but not from Japan to Korea, to such an extent Japan is still somewhat distant, both mentally and physically, from the rest of the world.

In recent years, while a welcome has been extended to Japan by other countries in many spheres they have also criticised her foreign policy, her methods of financial aid, and even her way of thinking. Similarly, although Japan has quickly assimilated many features of "Western civilization," it is said that she has still to understand Western ways of thinking. It is very likely that each side has measured the other by its own standards.

For Japan to fulfil her responsibility as a nation and contribute its share to the welfare of man, our primary concern should be to provide for new viewpoints in order to dissipate mutual misunderstanding. As some already know, the Japanese often most appreciate those who can fathom out, and sympathise with, their unexpressed emotions and ideas. This tendency, both agreeable and puzzling, has been a major cause of misapprehension. Foreign scholars and politicians attending international conferences in Japan, and Japanese scholars and other specialists working for foreign institutions, will bear witness to this.

At no time in the past have opportunities for unreserved exchange of views been sought after more keenly than at present, and it is our highest hope that this journal will serve as a ground for verbal, explicit communication.

It is not feasible to publish articles in all the languages now used in the world; so English will be a reasonable common medium. However, since the journal will be edited and published in Japan, and its main purpose is cultural exchange between Japan and other countries, we cannot exclude the Japanese language. Because the means of communication is limited to the two languages, the topics will naturally mostly be concerned with the two particular language-areas, but we also welcome subjects related to other places in the world.

Many Europeans, Americans, and others have now a good command of Japanese, and we shall be delighted to accept articles written in Japanese as well as in English. Writing in a second language should bring with it the opportunity for the writer to go through cultural barriers, consequently providing both writer and

reader with points of contact and deepening appreciation of the different culture. Whether the difficult task of using a second language will have this admirable result remains to be seen, but it is our hope that our contributors will be among those who seek improvement from outside themselves as well as from within their own world. The editorial staff will offer assistance in Japanese as well as English. We believe, not out of blind optimism, that to overcome the problems involved in using a foreign language will be a means of promoting mutual friendship among nations. The journal can thus serve as an exercise ground or a 道場 for an exchange of ideas among those who share a common interest in language and culture.

We plan to publish essays, translations of literary works, and general articles, including a column in which letters to the editor will be welcomed for exchange of opinions and ideas.

Haruhide Mori
Editor

Spring 1978

座談会

—毎号連載—

# 漫画と劇画と戯画と

スーザン・ゴールドマン（大阪工業大学講師）
アリステア・シートン（神戸大学外国人教師）
小島輝正（神戸大学教養部長）
渡辺孔二（神戸大学助教授）
田中武志（山口書店編集部）
司会　森晴秀（「道」誌編集長）

**森**　創刊号から今後毎号、異国間の相互理解、あるいは誤解の、いわゆる接点となるべき問題を取り上げて、日本人と外国人による座談会をやってみようと考えています。

第一回目の話題として漫画を思いつきましたのは、まず、極めて狭い領域のことをやっている、例えば私のような人間が、国際的な文化交流という大それたことに係わりをもつこと自体が漫画である。（笑声）第二にですね、外国人が日本語で、日本人が英語で、それぞれ十分に内容を表現し切れるとは限らぬ外国語でものを書くという、本誌の企画そのものが何かしら面白い。他方、漫画といえるほどに上等なものじゃないが、少なくとも滑稽である、という批判もあった。——これに対する反論は、本誌の企画が、将来もしも国際的に認められたときには不要になるので、ここでは致しませんが——まあ、そんな訳で、それじゃあ開き直って漫画から始めようということになりました。

漫画といっても、内容によっては、説明抜きで外国人が直ぐに理解できるもの、最初はわからなくても、説明されればわかった気になれるもの、いくら説明されてもなぜ面白いのか全然わからないものなど、種々の段階を考えることができます。

今日は幸い、日本のことをよくご存じのイギリス人とアメリカ人お一人ずつが加わって下さいました。それに、かつて、ある講演で漫画論を開陳なさったこともあり、西洋文学、日本文学にご造詣の深い小島さん、J・スウィフトの研究家として知られる渡辺さん、本誌編集部の田中さんなど、多士済々でありますので、大いに討論していただけるものと期待しています。

ただ、一言お断りしておきますが、それは今日用いることばについてです。英語と日本語を使用するというのが本誌の原則ですが、座談会で日本人の参加者が英語で、外国人が日本語でというのでは、あまりにもマンガチックである……

**ゴールドマン**　ちょっと待って下さい。その「マンガチック」というのは何語ですか。日本語ですか。

**森**　えっ……これは、どうも。（笑声）つまり、その……

**シートン**　日本人の造語法的才能を示す“Japanese English”ですね。「マンガ」に形容詞の語尾をくっつけたものです。

**森**　どうも、ありがとう。みなさんこの通り、日本語がよくおできになるし、すでに日本語で始めておりますから、このままでやりましょう。いずれにせよ、対談や座談会の場合は、われわれの原則は当てはまりませんね。

では、最初の話題です。「サザエさん」の漫画の中で、傘に隠れてソフトクリームをなめているのがあります。

一コマ目は雨の中を傘をさして歩いている和服姿の女性がサザエさんに気づき呼びかける。次は洋服姿のサザエさんが傘で顔を隠したまま通りかかる。相手の女性は彼女を呼びとめるが、前かがみになった彼女は、小走りで女性に構わず通り過ぎて行く。顔は隠したまま。奥さんの傘の上に大きなハテナのしるし。四コマ目で一人っきりになった彼女は傘からパッと顔を出し、大きな舌をペロリ。頬が赤らみ、手に持っているのはソフトクリーム。（註「サザエさん」からのことばの引用も画面の転載もすべて禁じられているので、「サザエさん」五五巻、五四頁参照。姉妹社、昭和四三年）

こちらからのコメントは一切抜きにして、ゴールドマンさん、シートンさん、どうお考えですか。

## 「恥」

**ゴールドマン**　理解はできます。でも、面白いとは思いません。

**シートン**　やはり西洋とは違いますね。日本人は、道路ではほとんど食べられないし、飲めないですが、西洋ではソフトクリームを道で食べてもいいんですね、礼儀からいえば。

私は、日本に長く滞在していますから理解できますけど、来日したばかりの外国人であれば、理解できないでしょう。

**ゴールドマン**　私も日本には五年います。歩きながら食べたり飲んだりすることは、行儀が悪いということは知っています。でも、私はこの絵を見て、シートンさんのように、礼儀という観点から描かれているとは思いませんでした。

この漫画は、自分一人がアイスクリームを持っていて、友達にあげられないので隠そうとしているのかしら、と思いました。

**森**　なるほど。この漫画を最初に取り上げたのは、初めてアメリカの土を踏んだ時のことですが、ある程度のショックを受けたからなんです。

例えばスーパー・マーケットで、一見上品な奥様風の女性が、ポップコーンを小脇にボリボリやっていらっしゃる。街中を、歩きながらアイスクリームをなめている。その後も観察していると、大学教授も例外ではない。それならこっちもというわけで、日本人としては、誠に「はしたない」とは思いつつ、けっこう楽しませていただきましたが。

**ゴールドマン**　だいたい、アメリカでは「立ち食い」「歩き食い」は別にはしたない行為ではないんですね。もしそうなら、パーティーはできません。もちろん、食べるものによりますが。

例えば、トウモロコシ、フライドチキンなど、手が汚れるものは立ち食いはしません。ソフトクリームなどは、わざわざ座って食べるほどのものじゃないんですね。これはヨーロッパでも同じだと思いますよ。中近東や台湾でも見ました。

下品という点では、「早食い」と「音をたてて食べる」ことの方が下品じゃないかしら。日本人が、うどんやラーメンを音をたてて食べるのは、私には非常に下品に感じられます。抹茶をいただくときの音は仕方ないとしても。



**森**　シートンさんは、イギリス人として、この点をどう考えられますか。

**シートン**　そうね、まあ、女王様ならソフトクリームを片手に持って、人前を歩かれることはないでしょうね。（爆笑）

**小島**　日本人の場合、ものを食べるという行為は一種の生理現象で、そもそも、はしたない、下品なことであり、従って人前でするべきことでないという基本的な感覚があるんだね。

**森**　ところで、この漫画の四コマ目のサザエさんの表情ですが、ゴールドマンさんは、ずばり、どういう心理を表わしていると考えられますか。

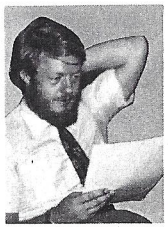
**ゴールドマン**　先ほども言いましたように、ソフトクリームが一つしかなくて、友達にあげられないので、うまく逃げたという感じです。

**小島**　私は冷や汗だと思うね。

**田中**　私は冷や汗と同時に、見つからずに済んだという安堵感が混っているように思います。ひょっとして、照れ笑いかもしれませんね。

**小島**　照れ笑いねえ……。時代の相違だねえ。（笑声）

**渡辺**　この四コマ目は、安堵、冷や汗、首尾上々のいずれにせよ「恥」を基本に描かれている。



アリステア・シートン

## 「プライバシー」と「情」

**シートン**　そうですね。もう一つの一ＤＫの漫画についていえば、これは、日本人の建前と本音の違いを示す好例だと思います。

**森**　また「サザエさん」です。「一ＤＫのエチケット」の見出しがあります。転載できないのが残念ですね。下着のままの旦那が寝そべってものを食っている傍に奥さんがいる。そこへサザエさんの訪問。夫婦が大慌てで帯を探し、旦那さんの身づくろいをする。衣紋掛けはふっ飛び大混乱です。旦那の方は髪を整え、奥さんは衣紋掛けを元の場所へ。その間中サザエさんは戸口を向いてとりすましている。最後のコマで急にふり向き、彼女は大袈裟に、まあ、旦那さまがご在宅でしたかと大声で挨拶する。この状況設定には、いくら漫画でも少し無理はあるのですが……。（五五巻、九三頁）

**小島**　この漫画のように、外国では一ＤＫなどという家屋構造もベルを鳴らして直ぐに家の中に入るということもあまりないでしょうが、仮に、イギリス、アメリカでこの状況を設定した場合、このように、やはり慌てて身支度をするのか、それとも、そのままの恰好でいけるのか……

**シートン**　そうです。そのままです。

**小島**　そうでしょう。日本人は、たとえ内幕がばれていようが、他人に接する時は普段着のままであってはならない。この場合だったら、着物を着て応待しなければ相手に失礼になると考えてしまうのですね。

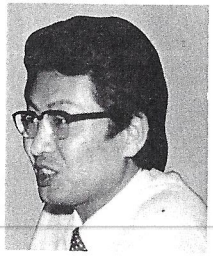
ただし、これは建前で、本音は嫌なところを見られた、何でこんな時に来やがったんだ。気の利かないやつだという……

**ゴールドマン**　アメリカでは必ず着替えます。下着を他人に見せることは大変失礼だからです。

しかし、このサザエさんの最後の発言はとても失礼ですね。突然家の中に入ってきて、他人の恥部を見ておきながら知らぬ振りをしています。はっきりと詫びるべきです。

アメリカでは、他人の家を訪問する時は、電話をするか、何らかの連絡をするのが礼儀です。非常に親しい間柄では別ですが。

**渡辺**　もちろん日本人でも謝りますし、前もって連絡はします。ところで、この漫画では、嫌なところを見られたと感じているはずの男が、かしこまって真面目に返答していますね。この場合、あなただったらどうなさいますか。



森　晴秀

**ゴールドマン**　もちろん個人差があるでしょうが、私だったら軽蔑します。この場合は、サザエさんの方が恥を知るべきです。

**田中**　日本人だったら、見られた方が恥ずかしがりませんか。

**森**　そうだと思います。これで、ほぼ焦点が合ってきた感じなんですが、ゴールドマンさんのおっしゃる恥はエチケットに違反した恥ずかしい行為ということで、それをサザエさんが犯した、とにかく、けしからん、という印象があるわけですね。だからちっとも、この漫画は面白くない。

**ゴールドマン**　そうです。また、家の中に入れた方も、鍵をかけていなかったという点で悪いんです。自分のプライバシーを守ろうとしていません。

**森**　そこが、西洋的論理と日本的論理の違う点ではないでしょうか。日本人からみれば、サザエさんは、確かに気恥ずかしい思いをしているに違いない。それには十分同情の余地がある。無礼を責めるよりは、むしろサザエさんの「ばつの悪さ」に共感できる。

スーザン・ゴールドマン

だからこそ、たとえゴールドマンさんが指摘されるように、それが無礼な発言だとしても、あくまで私は何も見ていません、という建前の誇張を表現したものとして笑うことができる。

**田中**　もはや建前にならない建前を繕っている点に、われわれ日本人は面白さを感じるんですね。これは相手の男の方にも当てはまりますね。そして笑いの基本に情がある。ゴールドマンさんの意見を考慮して、知に働けば角が立つ。情に棹させば流される、といってもよいと思いますが。

**森**　その通りだと思います。

**シートン**　しかし、この旦那さんは哀れですよ。（笑声）寛大といえば寛大といえますが、何かしら寛美さんの新喜劇のようなところがありますね。

**森**　さすが言語学者だけあって、頭韻をふむのがお上手ですね。（笑声）

**シートン**　ごろ寝でテレビというのが、日本のサラリーマンの息抜きでしょう。哀れです。（笑声）

**森**　するとですね、シートンさんのおっしゃるのを伺っていると、あなたには、この漫画は一応面白い。貧乏な中年男の悲哀がよく表現されている。しかし一方で、あなたや私のように中年ではなく、はるかにお若いアメリカ人であるゴールドマンさんには全然面白くない。とすると、外国人の理解度にも個人差があるということですね。

**ゴールドマン**　**シートン**　（同時に）それはそうでしょうね。

**渡辺**　ところで、先ほどから話題になっている建前ですが、日常生活の中で、われわれが気づかずに見逃しているような具体例が他にあるでしょうか。

**森**　ありますね。例えば、日本の家屋に見られる襖、障子、衝立がそうです。隣室の声は聴くまいとしても聞こえます。一つの空間を作って、外界と隔てているようでありながら、その機能は果しません。実用的じゃないですね。

つまり、襖や障子があれば、隣の物音や人声は聞こえないこととしておく、という約束事です。同時に、襖や障子は直ぐに取り外し



て、例えば法事などでは、他人が参加する行事のために空間を拡大することができる。

**シートン**　すると、その「としておく約束事」というのは、家族よりも他人に向けられたものでしょうか。

つまり、私ども外国人は日本式の旅館の襖の向こう側の声に、いつも悩まされますが、日本人には全然聞こえない。聞こえないといいながら、隣のハネムーンの声だけはよく聞こえる。非常に優れた、進化した耳の所有者が日本人だといえますね。（爆笑）

**森**　そこまでわかっておられるのなら何をかいわんやです。（笑声）このあたりで次へ進みましょうか。秋竜山のものです。

## 「プライバシー」と「身内意識」

**ゴールドマン**　これはプライバシーを扱っていますね。

**シートン**　そうですね。これは非常に国際的なものだと思いますよ。日本的とはいえないんじゃないでしょうか。

イギリスでも、"An Englishman's home is his castle." という諺があるほどです。

**ゴールドマン**　アメリカでは、自分のためと同時に、客に見せるために庭を造ります。しかし一般には、他人のものを凝視することは失礼であるとされています。でも「花が美しいですね」というような挨拶をすると、うまくゆきます。

週刊朝日 5/23, 1975

だから私がこの漫画で理解できないのは、世帯主が初めから怒っている点です。

**小島**　「ケチ」なんだなあ。見たい、見せたくない、という欲望が両方の側にあるんだね。

**森**　今シートンさんが "An Englishman's home is his castle." ということをいわれた。日本でも、「古事記」に速須佐男命が櫛名田比賣と結婚して、八重垣でマイホームを囲ったという話があります。よく似ていても、日本人は、自分の囲いの中に全部自分の所有物として入れてしまうところがある。例えば、今日、一DKの部屋に空間がなくても洗濯機を買い込む。銭湯は別としても。

**ゴールドマン**　そうですか。アメリカでは、何階もあるアパートでは個人所有の洗濯機は禁止されています。水道の使用量がたまりませんし。

**森**　とにかく日本人の家庭の生活空間は、あなたの国に較べると極端に狭いんですね。平方マイル当たりの人口は、アメリカは一桁なのに、日本は三百人ぐらいです。

それでも狭い国土に誰もが必死で一戸を構えようとする。戦後、爆発的に多くなった建売住宅がそのいい例です。

敷地面積が狭いもんだから、どうしても隣同士の窓と窓が接近する。民法で、隣家の窓が一メートル未満の距離しかない場合には、目隠しを作ることを決めているほどです。同じ大きさの家で、同一水平面に建つ場合はお互いさまだが、斜面を開発した場合とか、一戸建の隣にマンションができた場合には、たちまち覗かれるという意識が生じる。もっとも、「覗かれる、覗かれる」というパラノイアに陥っている人の方が、隣家の中をよく観察しているんでしょうけど……。

ですから、この秋竜山の世帯主も日本的パラノイアにかかっている。自分を守るためには、関わりのない他人にまで突っ掛かってゆく。後方でクラクションが鳴る。首筋をズドン！（笑声）

**ゴールドマン**　それでも、日本人には他人との協力を惜しまないところがあるんじゃないですか。江戸時代に五人組の責任分担制度というのがあったでしょう。

アメリカでは、相互に行動を規制する制度は考えられないです。軍隊の規律は知らないですけど。

**森**　現在の日本人の人間関係は、実にギスギスしています。私がスーパー・マーケットの前で目撃したことですが、よく肥った気品のある奥様が、重い買物袋をぶら下げて歩きはじめる。その袋がよそ様の子供にぶつかり、子供が倒れて泣き出しても彼女は見向きもしない。これで怪我でもさせれば、アメリカやイギリスだったら裁判沙汰でしょう。

あるいは、電車に乗る時、降りる時、激しくぶつかり合いながらわれ先に突進する。百貨店のカウンターでも、先客を押しのけて先に物を買おうとする。このような日本人の攻撃性というか、自閉症の裏返しというか、これは全く日常的な現象ですが、シートンさんどう考えられますか。もっとも、自国の正当化と他国への攻撃ということでは、イギリスもアメリカも引けを取らないと思いますが。

**シートン**　その最後の点は別として、日本人は協力ということばに内と外という区別をしているのではないですか。家庭や会社という同一集団の中では協力しても、一歩外に出ると、例えば、煙草の吸い殻をどこにでも平気で捨てることができる。

**小島**　そうです。日本人は外に出た場合、他人は油断のならない敵なんです。ロ一つ利かない。この野郎、どこのやつだなんて思っている。警戒してるんですね。しかし、相手の素姓がわかれば、けっこう話もする。つまり自分の身内に取り込めば、たちまち親しくなります。場合によっては必要以上に親しくなる。

だから、ゴールドマンさんが先ほど指摘された日本人の協力関係にしても、これは身内意識なんですね。広い意味での社会的構成員としての協力意識は、ほとんどないといってもいい。

**田中**　とすれば、先のゴールドマンさんの疑問に対しては、身内意識という考えを持ち込むと、よく理解できるわけですか。身内ではない他人から自分の花を隠そうとする、そこに力点があるということになりますか。

**小島**　なるほど。うまい解釈だとは思うんだが、身内意識とケチ根性が、それだけでうまく繋がるかどうかは問題ですね。

**ゴールドマン**　それはともかく、日本人は宴会で盃を交換しますね。なぜ、あんな不潔なことをするんですか。

**渡辺**　いや、それはね、先ほどの身内意識で説明できますよ。食べるという醜い行為、口をつけるという気持ち悪さ、それは身内の間でなら相互に交換できるのです。往々にして強要することもあります。欧米でも、一緒に飲み食いすれば親しくなるでしょう。もっと進めばキスにもなるし。（笑声）

## 「いくら説明されても、全然わからないもの」

**森**　では、日本のものはこれぐらいにして、次にアメリカの漫画に移りましょうか。スヌーピーを取り上げたのは、サザエさんなどとは随分と違いがあると思ったからです。先ず、外国人の方々からご意見を願います。

**シートン**　やはりイギリスとアメリカでは全く違います。第一、私がスヌーピーを知ったのは、日本で初めてなんです。恐らくイギリスではほとんど読まれていないでしょう。

ご承知のように、イギリス人は皮肉を好みます。それも知的なも



のです。しかしスヌーピーは、子供向けに描かれています。しかもこの漫画は "Security Blanket" を知らなければ、全然理解できないでしょう。この男の子なんか、私は馬鹿じゃないかと思いますね。

**ゴールドマン**　そうではありません。アメリカの子供はスヌーピーを読んでいません。作者、シュルツも言っているように、これは子供向けのものではないんです。大人の目を通して、大人が発見した子供の姿です。

しかし、一応断っておきますが、アメリカでは漫画は軽蔑されています。教養ある人は絶対に読みません。ニューヨーク・タイムズなどは、漫画を絶対に入れません。つまり、漫画は子供のものなんです。

**森**　これは面白くなってきた。すると、アメリカの大学でこのような座談会をやったとする。どういう評価を受けるでしょうか。

**ゴールドマン**　せいぜい児童文学の研究というところでしょうか。

**森**　つまり、研究対象の価値評価が低い場合、その研究も低く評価されるということですか。結局は、今ここでやっているわれわれの座談会も下らんものということになる、そういう意味ですか。

**小島**　そういうことになるんだろうね。（笑声）

**ゴールドマン**　少なくとも、児童心理の研究という点では存在意義があります。

**森**　これは一本取られました。ところで、日本でスヌーピーが氾濫していることは確かです。この点で、日本人はやはりまだ十二歳ですかね。

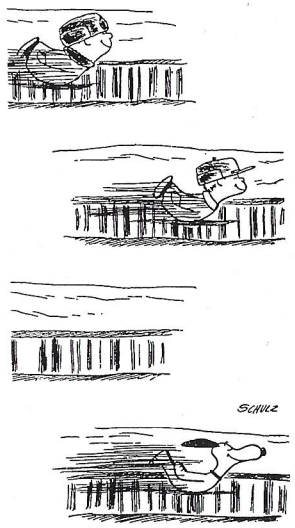
**ゴールドマン**　私の知っている日本人学生で、男性ですけど、スヌーピーのぬいぐるみを部屋に飾っているんです。少し頭が変じゃないのかしら。

**森**　頭がおかしいという点では男性に限りません。女性で、しかも大人が、部屋中スヌーピーだらけにして、ぬいぐるみはおろか、ハンカチ、エプロン、メモその他、オモチャ屋の宣伝みたいにしておきながら得意満面、これで部屋の飾りつけは満点だと信じ込んでいる人がいるんです。

**小島**　えらい詳しいんだね。（爆笑）

**渡辺**　私はスヌーピーを見ていると、日本の少女漫画を思い出します。少女漫画は、登場人物の顔が非個性的というか、ほとんど同じですが、スヌーピーもそうですね。何らかの関連を感じさせる。

**シートン**　全然、ユーモアがありませんね。つまらないです。



**小島**　私もちっとも面白くない。

**森**　これはどうも。皆さんが問題にされないのでは困りました。実をいうと私には興味があって、シリーズその他で出ている本は、全部読んでいるというか、見ています。ぬいぐるみは持っていませんがね。（笑声）

ライナスのタオル、犬の踊り、チャーリーのおとぼけにしても幾度か変化を伴って反復される。それを読者の方が、また出るぞ、と期待する楽しさがある。ルーシーとチャーリーの会話にしても、大人の、それも大仰な人生哲学を語らせるところがある。画面の動きの呼吸と哲学趣味で、読者が小馬鹿にされるところがある。

しかし、ひとひねりされたイギリス的なユーモアではない。あっけらかんとした、ヒッチコックのポーカーフェイスとでもいいましょうか。少し荒い言い方をすれば、非常にアメリカ的な漫画です。

ルーシーが、チャーリーとの会話で全く別のことを答えるはぐらかしがある。これなどは、ダグウッドにガミガミ怒鳴られている間かしこまって承っていたブロンディが、最後に「あなたがものを言うときは、下の唇だけが動くのね」と、さも大発見したかのように言う一コマがありますが、これとよく似ている。このあたりの切れ味は「スヌーピー」の方が「ブロンディ」より劣ります。コマ切れの画面ではなく、全部を読めば、先ずこれぐらいはわかってくる。

**小島**　大変な熱の入れようだね。（爆笑）

**森**　それはそれぐらいにして（笑声）先ほどの日本での氾濫ですが、これはどう理解すべきでしょう。

熱を入れている個人の精神状態はさておくとして、日本人が買うのは主としてハンカチに描かれた一つの図案としてではないでしょうか。サザエさんの作者には失礼な言い方だが、サザエさんのハンカチよりは、スヌーピーのハンカチの方がずっとハイカラだ。少なくとも、舶来のものを身につけるという俗物の虚栄心は満足させられる、というところでしょうかね。

ゴールドマンさんは、スヌーピーはアメリカでは大人向けといわれるが、日本では幼児期を脱け出していない大人を含めて、子供向けのものとして受け入れられている。

**シートン**　スヌーピーの漫画よりは、そのことの方が私には興味がありますよ。（笑声）

## 「劇画」

**森**　では次に、いわゆるアニメーションといわれている漫画や劇画などを中心にお願いします。特に小島さんは、以前に劇画論をおやりになった専門家でいらっしゃるわけで、一つ中心になって話を進めていただけませんか。私は劇画には、まだおつき合いを願っていないので語る資格がありません。

**小島**　現在、日本では劇画ブームといわれているようですが、どうなんですかね。アメリカ、イギリスの若い世代は読んでますか。日本では、三十歳ぐらいの年齢の人までが電車の中で必死に読んでいますが。

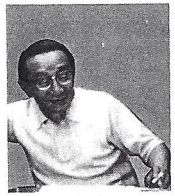
**ゴールドマン**　ああ、あの光景は異様ですね。全く不思議です。

**シートン**　日本のように、百頁かそれ以上もある漫画などは外国にはないんじゃないですか、少なくともイギリスでは、長くとも二・三頁です。

**ゴールドマン**　アメリカ人の場合は、先にも申しましたように、絵を見せなければ意味がわからない人、つまり文字の読めない、教養のない人が読みます。

**森**　私は、アメリカのスーパー・マーケットやドラッグ・ストアで、漫画本の置いてあるコーナーに、立派な教育を受けているはずの大学生をよく見かけましたよ。

渡辺孔二



小島輝正

**ゴールドマン**　そうですか。あなたは意地悪です。（爆笑）教育のない人を教育する目的で、漫画を再認識する考え方はあります。しかし、それがアメリカの主流だとはいえません。漫画は軽蔑されています。

**小島**　日本でも、僕らは劇画をまるっきり軽蔑しているんだが、例えば、ある青年に「いい年をして劇画なんか読むな」と言ったとすると逆に怒られるんですよ。「それは認識不足だ。劇画の中にも内容の立派なのがある」と言ってね。「例えば〈ベルサイユのバラ〉などは、ちゃんと史実に基づいている」と……。

**田中**　そうかも知れませんね。もともと医者だった手塚治虫などは、劇画によって医学界、政界などの腐敗ぶりを批判しています。

**小島**　そう言います、僕の息子なんかも。これが手塚治虫のファンで、いい年をして手塚の本は全部買いそろえている。劇画にもストーリーがある以上、意味内容はある。

しかし劇画の中心は、やはり絵ですよ。絵がなくなったら誰も読みはしない。要するに、絵入りのストーリーでなければ読まないという精神構造が問題なんです。絵入りから文字だけに進歩してきた小説の歴史に、読者の側から逆行している。

しかもその絵たるや、すべてパターン化している。正義の顔、悪の顔は、それぞれ最初から固定化している。想像力のこういうパターン化現象は、テレビ文化と並んで現在の日本文化の一つの特徴で、これが随分害悪を流していると思う。

**渡辺**　劇画は、系統的には紙芝居です。漫画の本質は誇張、省略、比喩によって、イマジネーションが拡大される面白さがあるのに、劇画では逆に制約されるわけですね。危険な現象です。

**シートン**　こんな風にはいえませんか。日本人の生活は忙しく、映画に行く時間がない。しかし劇画なら長距離トラックの運転席でも読める。

**小島**　そう、手っ取り早いんだね。劇画を子供の頃から見慣れていると、あの劇画的な事件進行のプロセスや解決方法が、それこそパターン化して意識に組み込まれてしまう。現実の見方が劇画的になってしまうんです。ポルノ小説を読みすぎて、現実のセックスをポルノ的にしか考えないようになるのと同じだ。

もっとも、劇画だけが今の世代の意識を形成したといっているわけではない。世代を動かす要因は、もっと複雑なものだとは思いますが……。

**渡辺**　今の劇画は、消滅寸前の虚しい華やかさではないですか。もう消え去りますよ。

**森**　子供を持ってしまって、小学校のことを考えざるを得なくなったヒッピー族ってわけですか。結果が示されていないだけに、読者の側で自から体験せざるを得ない。体験すれば、何らかの破滅とともに終わりがやってくる。

そこから、また別の方向も現れるんでしょうけれど、困るのは、読者は一人とか、ある特定の年齢層だけではない。後続部隊が続々とやってくる。しかしその場合でも、ある一定の時間が経てば、ヒッピー族のように自然に淘汰されるものと信じることはできないでしょうか。

**田中**　消え去りはするでしょうが、その過程において、新しい世代も古い世代も、相互に対立する価値観の矢面に立たされているということを、私の問題としてとらえることが重要だと思いますが。

**小島**　そうあって欲しいが、現実には三十面して、子供の一人や二人ありそうなのが、新大阪から東京までとっかえ、ひっかえ劇画

雑誌を読みふけっているからね。世も末だと思うよ。

**森**　イギリス、アメリカではこのような状況はありますか。

**ゴールドマン　シートン**　（同時に）全くありません。

**小島**　そうでしょう。異常というか「特殊日本的小児化状況」というか、（笑声）とにかく日本の場合は、極めてシリアスな問題まで劇画にしないと読んでもらえない。

**渡辺**　戦争を題材にしたものでも、日本は戦時中、ルーズベルト、チャーチルを向になって攻撃する、いわゆる鬼畜米英的な絵を描いた。向こうの方では、中国をヘビ、日本をカラスにしてちゃかしています。向こうのは漫画、こっちのは劇画でした。

**小島**　そういう意味では、劇画の流行には日本的風土があったんだね。新しく劇画が出てきたというよりは、日本的な思考方法がさらに強く出てきたという方が正しいかも知れない。

**シートン**　それなら、今の中共も同じじゃないですか。例の四人組の漫画なんか、ちゃかすよりは向になって攻撃している。

**小島**　そうです。そういう点に限っていえば、今、中国がやっていることは旧日本の拡大再生産ともいえる。

**シートン**　東洋のソ連圏とも限らないが、そういうことは政治的スローガンにも見られますね。

**森**　そのことは、現在の日本の政党の大会や、学生運動のスローガンについても同じことがいえます。一旦ある方向を定めれば、もうそれ以外に世界はなくなってしまう。

田中武志

**田中**　絵入り小説が世間一般に認められているのは日本だけだとすると、これは日本的精神状態として、将来にも続くということでしょうか。

**渡辺**　いや、もう終わりですよ。もう流行しません。

**小島**　毛沢東伝が劇画で出てきた時、僕は絶望しましたよ。

**森**　絶望といえば、幼稚園などにはお絵かきクラスというのがありましてね、三歳から五歳ぐらいまでの子供を集めて、保育時間のあと一時間ぐらい絵を教える先生が来ます。

そこで描いている絵は、絵といえる代物ではない。上手、下手は別です。漫画や劇画の絵、ベル・バラの女の子の顔です。漫画が絵画ではないとは教えない。子供の想像（創造）力を拡げることはしないで、漫画の模写を奨励している。

私は絵の教育方法というのは知りませんが、絵画が芸術である限り、子供の想像（創造）力を摘み取ってはならない。もっとも母親の方も、ちょっとでも手間が省けるもんだから、そんなことにはお構いなしでしょうが。

**小島**　オスカルの顔の模写が、はい、お上手、三重マルてのは具合が悪いですわ。（笑声）

**渡辺**　絶望ばかりしないで下さいよ。（爆笑）「鳥獣戯画」へ帰る道が残されているんですから。

**小島**　その通りです。しかし、帰らないね。（笑声）

**田中**　帰らない今頃の世代の彼らをどうすれば……

**小島**　そりゃあ、ほったらかして、飽きるのを待つよりしょうがないだろうね。（爆笑）

**渡辺**　飽きて「鳥獣戯画」の世界へ戻ってくれればいいのですがねえ。（爆笑）

**シートン**　西洋でも、キッネのような伝統的な動物でもって、善悪を表現したことはありますでしょう。私はその意味では、劇画ではなく「戯画」は西洋にもあると思う。

**渡辺**　もちろん「戯画」はインターナショナルです。要するに、われわれのイマジネーションを拡大してくれる描き方をやって欲しいし、そういう描き方に興味をもつようになって欲しいですね。

**森**　比較漫画論を真面目にやるつもりのところが、それは途中で吹っ飛んでしまって、（笑声）しかし、いろいろと事の本質に関わる話題が沸騰したことは何よりでした。今日はこのへんで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。